

〈論文〉

記憶・持続・変化(1) ——〈忘却〉をめぐって

Memory, Persistence, Change — About 〈Forgetting〉

松島 恵 介

はじめに — 「忘却」という問題

古くはアリストテレスが記憶を蠟刻板に譬えたように、記憶といえば常に脳の中の空間がイメージされてきた。現代の心理学や認知科学においても、脳内貯蔵庫が仮定され、そこに情報が出し入れされるものとして記憶が捉えられている。こうしたモデルは、例えば人工知能研究には大いに寄与した。

いうまでもなく、ロボットにおける記憶とは情報である。情報とは、有りさえすれば、それを操作することが可能な存在である。ロボットにとっては、情報は得られるものであり、また、消去されるものである。

しかし果たして、人間の記憶はこうしたモデル化が可能なのか。

ロボット (もしくはコンピュータと言い換えてもよい) における〈情報〉と、我々の〈記憶〉とは、等しいものか。

この問題は、情報の「消去」と、人間の「忘却」との違いをみることで明らかになるだろう。

我々の記憶にとって、記憶の「完全な」消失と「不完全な」消失との境目は常に曖昧である。自身のこの境目を認識できる人間はこの世にひとりもないといってよいだろう。ロボットにとっては、情報は消失されるか残留されるかの二者択一であるが、人間にとって、両者の境界線は存在しない。我々は、記憶の完全な消失と不完全な消失について、両者を「忘れた」ということばで大きく代弁することができる。しかしロボットは自ら「忘

れた」と発言することは一切できない（発話できるロボットであったとしても）。仮に、ロボットが「忘れた」と言えるようになったとすれば、それは、彼が〈偽る〉という行為のひとつのバリエーションを身につけた、ということに過ぎない。なぜなら、ロボットとは、自らの内部に情報があることを常に自ら把握可能な存在であり、それを「忘れる」ことは不可能な存在だからである。コンピューターに「忘却」というコマンドを用いることは原理的に不可能である。

ただしロボットは、「消去します」と宣言することは可能である。一方我々は、そのように宣言することはできない。我々はもちろん、「今から〇〇を忘れるぞ」と宣言することもできない。

こうした違いは、ロボットにおいて情報が「ある」といった場合と、人間において記憶が「ある」といった場合の、「ある」の本質的差異に求められるだろう。ロボットにおいて情報が「ある」場合は、所有する主体にとって「ある」ことを把握可能であるが、人間において記憶が「ある」場合は、必ずしもそうではない。つまり、「情報」は必ず主体にとって顕在化しているものであるが、「記憶」は主体にとって潜在化したかたちで存在しうるという特殊性をもつわけである。コンピュータ内部の世界においては、情報は階層化されているが、潜在化されてはいない。それは、一定の手続きによって到達可能な何物かである。人間には潜在化という現象があるからこそ、我々は「忘れた」と発言することができるのである。注意すべきは、潜在化は、「隠されている」ことではない、ということだ。潜在化とは、「忘れられている」ことなのである。

だから、くだらない例でいえば、ロボットには〈予備バッテリー〉は必要ない。より正確にいえば、ロボットを動かす動力としての〈予備バッテリー〉は、ロボット自身にとっては全く必要がないものである。最初から本体のバッテリーにその容量を割り増しすればよい。もしロボットに予備バッテリーが組み込まれているとすれば、それは、そのロボットを利用するであろう人間の為に必要なものである。なぜなら、予備バッテリーにとって必要な条件とは、「忘却」であるからだ。予備バッテリーは、誰かによって一回以上その存在を忘れられなければ、予備バッテリーとしての意味（と機能）を持たないのである。もし、予備バッテリーがあることが常に思い出されているのであれば、それは「予備バッテリー」としてではなく、単なる「分割されたバッテリー」としてしか存在していない、というべきである。

さて、ここで述べた、忘却——潜在化——という現象は、人工的に物質で作り上げることはできないし、またシミュレーションすることもできない。それは、人間の記憶が、誰にとっても「制御」不可能な一面を持つからである。

我々の記憶は、我々特有のものである。コンピュータ用語でいう〈情報〉ではない。我々の脳は、ロボットで置き換えることはできないのである。

では、それはいったいなぜか。ここでこの問いに簡単な答えを与えることはできないが、恐らくこの問題は、ロボットが〈空間的〉存在であるのに対し、我々人間が〈時間的〉存在であることに関わる、と筆者は考える。

さしあたって本論は、従来の空間的メタファを持つ記憶モデルが触れてこなかった（もしくは触れることが出来ない）記憶現象の持つ時間的特質に焦点をあてるとともに、主体の時間的変化に有機的に連動するような記憶観を提出することを目的とする。

1. 学習とは忘却のことでもある

日常の現象から出発することを我々の原点としたい。

さて私は現在、自転車に乗ることができる。しばらく自転車に乗ることがなくても、ひょいと自転車にまたがれば、すいすいと漕ぎ出すことができる。

ただし私は生まれたときから自転車に乗れたわけではない。そこには血のにじむような「自転車に乗れるようになるための」日々があったはずである。それを思い出してみよう。

……しかしどうもよく思い出すことができない。こうした記憶が喚起されない状態については、一般には記憶能力の問題として扱われてきた。果たしてそういった説明がほんとうに妥当であるのかどうか。この点を議論してみたい。

更に思い出す努力をしてみよう。私は両親に自転車を買ってもらった日のことは実はとてもよく覚えている。自転車が運び込まれてきた様子、とても嬉しかったという当時の感情、など、かなり具体的に覚えている。しかしよく考えてみると、この日は自転車に乗る為の練習よりも前の出来事である。なぜ自転車を買ってもらった日の出来事は覚えていて、それ以後の自転車に乗る為の練習を「忘れた」のであろうか。

時間が経ってしまったので忘却が起きた、ということでもないようである。私は自転車購入以前、たとえば4歳のころの出来事であってもその幾つかを思い出すことができる。こうなると、記憶は時間経過に従って衰え、消滅していく、という一般的な説明はうまくない。

では、自転車を買ってもらったことが嬉しいのに比べて、自転車に乗る為の練習が辛かったから忘れてしまったのだろうか。自己の辛い記憶を無意識の世界に封じ込めているのであろうか。否、日々すこしづつ上手に乗れるようになっていくことには大きな喜びが含まれており、こうした喜びは、自転車を買ってもらったときの喜びに匹敵するものであろう。

それにもかかわらず私は、自転車を買ってもらったときのことは覚えていても、自転車に乗れるようになるための日々をうまく思い出す事が出来ないのだ。

恐らくこの問題も、精神分析学で言及されるような無意識的「抑圧」とは関係がない。

では、私は何によって思い出すことが不可能になったのであろうか。

この問いについて、生態心理学者であり哲学者でもあったエドワード・リードは、自転車に乗れたことによって、自転車に乗れなかった私が忘却されるのだ、という説明をする。彼によれば、「学習をするとは、『学習していない私』を忘れること」である。こうした場合には、そもそも想起は不可能であり、それはただ推論されるだけである、という。

さて、リードのこの言及はどのように理解したらよいだろうか。

我々なりに別の問題にも当て嵌めて考えてみよう。

私は現在、ある程度、英語を読み、書くことができる。英語の勉強は得意ではなかったが、それなりに落第しないで学生を終えることができた。私は日本人であるから、生まれたときから英語が話せたわけではない。つまり、中学校で英語の教科書を開くまで、私は英語の読み書きが出来なかったのである。

では、先程と同様に、出来なかった自分、すなわち、「英語を読めなかった自分」のことを思い出してみよう。

……やはり、結果は同様である。思い出すことは不可能である。

より具体的に考えてみよう。英語を読めなかった当時の私は、例えば「boy」というつづりを見て「なんか変な形だなあ」「なんだいこれいったい」と思っていたはずである。「boy＝ボーイ」などとは絶対に見えなかったはずである。すなわち、小学生の私は、boyを、〈今の私が当たり前に見える英語のboyではないものとして〉見ていたはずなのだが、そのような見えをもった「boy」は、どのようにしても思い出すことは出来ない。

いまひとつの例で考えてみよう。これは私的な経験になる。私は、小学校3年生の時にスチールでできた筆箱を買ってもらった。真っ黒でぴかぴかのそれは、ずいぶんねだって買ってもらったものでもあり、私の大のお気に入りとなった。退屈だった授業中にはいつもその筆箱をいじっていた。この表面には、大きく「MESSAGE」と美しい七色の文字で書いてあったのだが、それにいつも見とれていたことを思い出す。結局その筆箱は小学校卒業までの約3年間、殆ど毎日のように使った。今現在でも、表面の黒地に浮かび上がった文字の虹色の美しさと、3年間使用していた為にできた表面の大小の傷の位置について

も鮮明に思い出すことができる。

しかし、である。どうしても、その当時わたしによって読まれていたであろう「MESSAGE」という文字そのものを想起することはできない。英語を読むことの出来なかった私は、「MESSAGE」という線の集合を、まちがいなく、ひらがなでもカタカナでも数字でもない「へんてこなぐにゃぐにゃ線」としてしか知覚できていなかったはずなのだが、当時のそのような知覚を今の私は絶対に思い出すことができなくなっている。

先にあげた boy という文字と全く同じように、いま「メッセージ」とはつきり読めるこのアルファベットを、そうでないものとして、思い出すことはできないのである。私はしかし、同じ頃に起きた他の多くの出来事はかなり鮮明に覚えている。そして、先にも述べたように、私は、授業中にそれを眺めていたという事実については覚えている。ところが、その眺められていた何物かを思い出すことは出来ないのである。すなわち、私は、〈それを眺めていたこと〉は思い出すことが出来るが、〈眺められていたそれ〉を思い出すことは出来ない。

すこし整理しよう。

私は小学校当時の様々な出来事を鮮明に思い出すことができるが、英語で書かれた文字については、その当時の知覚のままに思い出すことができない。そして現在、私は英語が出来、それらアルファベットを一連の意味あるものとして — boy をボーイとして、「MESSAGE」をメッセージとして — なんの障害もなく読むことが出来る。

果たして、こうした場合の説明原理として、「できるようになる」ことは「できなかったこと」を忘れさせる、といってもよいか。この現象は一般化して考えることが可能であろうか。

ここで、エドワート・リードが「学習をするとは、『学習していない私』を忘れることである」と述べるに至る議論を敷衍してみよう。

エドワード・リードは、まず、過去を思い出す際には自己が二重化している、という。

この二重化の仕方は記憶特有のものである。そこでは、現在の私が過去の私を眺めている、しかし現在の私と過去の私は離れてしまっているのではなく、同じ「私」としてつながっている。つまり、二つの「私」は、眺め／眺められるという主／客の関係にありながらも、それらは「私」としての同一性を保持しているのである。この一見逆説的なことを、彼は、「自己が分割されてはいるが分離してはいない状態」とであると表現する。

しかし考えてみるとすぐにわかることだが、このような状態でなければ、想起という行為は不可能になる。たとえば、現在の私と過去の私が全くつながっておらず事実上分離しているのならば、想起は、(それがもし可能であるならば)他人に起きた出来事を思い出しているようなものになってしまうだろう。また、現在の私と過去の私との間に何らの区別もない同一体があるとすれば、それは現在の私が過去の私を眺めることなど不可能な状態である。そこにはそもそも現在／過去の区別はなく、それはもはや記憶と呼べるものではない。いわば、常に現在でありつづける状態である。

「自己が分割されてはいるが分離してはいない状態」という二重化の構造こそが、記憶を成り立たしめる、とエドワード・リードは述べる。そして、「学習」によってこうした二重化は破壊され、想起することは不可能になり、「推論する」ことしかできなくなる、という。

ここから先は、我々なりにかみ砕いて考えていこう。

もういちど自転車の例で考えてみよう。自転車に乗れた私とは、自転車に乗ることを「学習した私」であると考えることができる。先にみたように、「乗れるようになった私」は「乗れなかった私」を思い出すことが出来ず、まさにエドワード・リードが述べるように推論することしか出来ない。周囲の状況から、推論し、「確かにそうだったはずだ」と思うのである。ここで生じている「二重化の破壊」はどのようなものか。

想起に必要な「二重化」とは、つながりつつ・つながらない、という特殊な構造であった。通常ならば、「現在の私」と「過去の私」とは、同一の私としてつながりつつ、現在／過去という時間的分割を受けている筈である。自転車の例では、「現在の私」と「過去の私」とは、現在／過去に分割されていることは明らかであるが、「私」としてつながっているかといえば、そうではない。自転車に乗れる私と、乗れない私、この二つは、全く重なる部分はない。ここで重要なことは、自転車に乗るということに関しては、「同じ私である」というつながりは、乗る学習が成功したことによって断ち切られ、分離させられたということである。自転車に乗るということについて、私はいわば生まれ変わったのであり、自転車に乗れる私と自転車に乗れない私とは、「自転車乗り」の次元では、別人であるといってもよいだろう。自転車に乗れる身体を持ってしまった私は、乗れなかったときの感触をもはや思い出すことはできない。

英語の例においても同じように考えることが可能であろう。英語ができるようになったということは、英語ができなかった私と切り離されることである。boy という文字を「ボーイ」という文字として知覚しながら同時に「(かつて知覚したであろう) へんてこなグニャグニャ線」として知覚することは出来ない。

ここで採り上げた「学習」という活動は、通常考えられているような、私に何かを「得る」ようなものでもないし、私に何か「加えられていく」ようなものでもない。学習とは、実は忘却とともにある現象である。

こうした「学習」は日常においては何ら特別な現象ではない。何かが出来ない状態から、何か出来る状態への移行は日常生活の至るところに起きているといえるだろう。恐らく我々は常に何らかのことを学習しているはずである。例えば、本を読むこともそうである。これまで知らなかったことを知ることが出来るようになることも、ここでいう学習の一つのバリエーションである。学習が生じれば忘却も生じる。たとえば、本を読んで地球が丸いことを知った私は、それを知らなかった私を思い出せないだろう。

我々はつねに何らかの新奇な体験をしているのであり、つねに何らかの学習をしているといえる。生き物の特徴とは、学習することであるということもできる。我々は常に忘却を生み続けているのである。ここでも再び重要なことは、我々の行なう「学習」は、高い水準のロボットがする「学習」とは異なる、ということである。ロボットのする学習とは、むしろ「書き換え」の作業に近いものであり、我々の、「忘却」を不可避に含む「学習」とは本質的に異なる。

我々の経験するこうした「忘却」は、ロボットのように、過去を情報に置き換えて空間内の何処かの「場所」に保存している記憶観では決して捉え切れない現象であることは確かである。

では、なぜ体験したはずの知覚がまるごと思い出せないのだろうか。それは消されてしまったのか、それとも思い出せないだけなのか。この問いに答えようとするには、〈時間〉についてももう少し考える方がよいだろう。

2. 持続と変化

これからのキーワードを設定しよう。

「持続」と「変化」である。

じつは、エドワード・リードが「二重化」という言葉にこめたのは、空間的な意味での二重性ではない。この概念の前提には、時間的なタームとしての「持続」と「変化」がある。これは、エドワード・リードが心酔した生態心理学者ジェームス・ギブソンが頻繁に用いたキーワードである（ちなみにこの『持続』という語は、哲学者ベルクソンが好んで用いたものでもあった）。語の意味や用法の詳しい解説はここでは省くが、本論ではこの二

つのタームには複雑な注釈はつけず、我々が普段用いているイメージとさほど変わらないものとして使用していくつもりである。ただし、折りに触れてこれらの言葉の意味を限定していく。

さて、想起を成り立たしめる二重化についてリードが述べた「分割されてはいるが分離してない状態」という語の説明として、先には「〈過去の私／現在の私〉という『区別』がある。しかし共に〈私である〉という『同一性』がある」というような言い方をした。この「区別」とか「同一性」といった空間的な表現を、「変化」と「持続」という時間的表現に移しかえてみると、「〈過去の私→現在の私〉という『変化』があった。しかしそこには〈私である〉ということが『持続』している」ということになる。

先の「学習による忘却」も、「持続」と「変化」というタームで再定式化しておかねばならない。学習によって、「変化」は生じたものの、「持続」が切断されたのだ、ということができるだろう。「変化」と「持続」のどちらか一方でも欠けた場合は、想起が不可能になる。

「持続」と「変化」というタームのもとに、忘却についての考察をもう少し深めていくことにしよう。我々は現象から出発すると述べた。類似の現象をみていこう。

A氏を3年間好きであった後に大喧嘩をし、A氏を大嫌いになったB子は、現在C氏と2年間付き合っている。B子はA氏を好きであったということをどのように想起するのであろうか。先の〈自転車〉・〈英語〉の例のように、それはもはや「思い出すことができない」のであろうか。そこには不可避な忘却が生まれているのだろうか。

以下は筆者によるB子へのインタビューをプロトコルデータに起こしたものである。

筆者「A氏のことをできるだけ詳しく思い出して欲しいんですが」

B子「今はC君っていう別の彼氏がいるので最近全然思い出したりなんかはしてないんですけど。いま思い出してみたっていわれて…やっぱり思い出せないです、どうしても。Aのことは…三年近く付き合ったのかな。えーよく会ってたから思い出せそうなものだけど、殆ど忘れちゃっています。けっこう最近のことなのに、思い出せないです。あ……夜中に長電話したりしてたかなあ。長電話してたことはしてたってわかるんですけど、その時の様子は…なんか全然覚えてないです。…ああそういえばだいたいぶん前なんですけど写真整理してたら思いっきりびっくりしちゃったことがあって。だって手つないだりしてるんだもの、信じられないっていうか…手つないだのか、そうか、好きだったのねっていわれると、きっとそうなんだよねえって

いうしかないですよねえ、だって証拠あがってるし（笑い）……」

筆者「好きだったっていうことは覚えているんでしょうか？」

B子「たぶん…」

筆者「たぶん、というのはどういう意味なんですか？」

B子「……いや、覚えてるっていうか……や正直いって、よくわからないんですよ。でも思い出したくないっていうのはあるんですけど、でも聞かれて思い出してみても、なんかひとごとみたいな感じで……いろいろさっき言ったみたいにブツ、写真とか、あとは貰ったものとかは捨てそびれたから残ってるんですよ。だからそうだったろうとは思いますがねえ。……でも好きだったはずなんて考えるとむかつくんですけど、ちょっと。」

筆者「具体的に何した、こうした、というようなことは覚えてますか？」

B子「具体的なこと…ああ、いま、やですけど、なんとなくなら……」

筆者「覚えているんですか？」

B子「まあ……かな。でもすごい断片的にですけどね。」

筆者「どういうふうに思い出せますか？」

B子「……頑張ってるんですけど……うまくいえないんだけど、かすかだけ思い出してはいるわけで、で、実感伴わないながらも……あと、なんていうかなんかすごいポツポツっていうか、コーヒー飲んでるところとか、あと道歩いてる場面とか、なんか、ほら、ドラマの最終回とかにあるじゃないですか、あの、セピア色の写真がぱっぱと、なんていったっけ、あフラッシュバック？　なんかスライド次から次から映すみたいな、ああいう感じですよ。私のはセピア色ってわけじゃないけど、でもほんとテレビ見ているみたく、なんかひとごとみたく実感ない感じでなんですけど。」

筆者「実感ないっていうのはもう少し別のことばで説明できますか？」

B子「全部、なんていうか、近くには見えてるんですけど、んー感覚だけでいっちゃうと、なんか向こうのほう、向こう側って感じかなあ。向こう側の出来事に起きているようなものみたいに、見えてくるんですよ。目の前には見えてはいるけど、えー自分のその当時に居る場所っていうか見てる場所とは全然別の場所で、っていうか……場所としては同じ場所なんだけど、向こう側に相手が見えてる感じな、ような感じなんです。……うーんと、透明なんだけどなんかこっちとそっちって区別されちゃってるような感じで。すぐそこに触れるところにあるけどきつと触れないだらうって感じですかねえ。」

やはり、彼女は思い出すことが相当に困難、ではあるようだ。この想起の困難性の原因をさぐってみよう。

辛うじて想起されているものを注意深くみていくと、過去の私と現在の私と同じ「私」であるという実感をことごとく欠いている点に特徴があることは明らかだろう。彼女は様々なメタファを用いて、過去がリアルな出来事として現われてこないことをさかんに強調している。彼女は当時の写真を見て、他人事のように驚いてさえいる。さらに、彼女はそれを見て信じられないけれども証拠があるから認めるしかないと述べている。これは、もはや過去を思い出す〈想起〉であるというよりは正に〈推論〉と呼ぶべきものである。

ここには先の「自転車」・「英語」の例と同じ特徴があらわれている。先の二つの例で起こっていた「学習」とここで起こっている出来事における共通性とは何だろうか。それはとりもなおさず、本来は過去の自己と現在の自己のあいだにあるべき「持続」の欠如なのである。「持続の欠如」によって想起が困難なものになっている、のである。

彼女の想起は、たとえば我々が照れくさい過去を思い出して顔を赤らめるといったこととは全く質的に異なっているといってよいだろう。彼女にとってここで想起されている過去は、顔を赤らめることすら出来ない過去なのである。顔を赤らめることが出来る過去は、現在との持続を果たしている。

また、彼女の想起は、失恋後に、好きだった相手の思い出をとうとうと語ることも、全く異なる。世の中に起こっている「失恋」がみなここに挙げたような「当事者性の欠如」を伴うわけではないのである。失恋した多くの人々はあまりにも生々しく、当時の自分と現在の自分をじかに繋ぎあわせる。

B子は失恋はした。しかしそれだけをいうのは十分ではない。B子は、失恋をしただけでなく、新しい恋愛をしたのである。そのことによって、恋愛という次元において、A氏を好きだった自分と、C氏を好きである自分との間に、同じ私であるという「持続」が成り立たなくなった、ということが出来るだろう。

だから、次のように考えることは可能である。

かりに、B子がA氏をまだ好きであったが仕方なく別れ、「A氏に似ているところがある」という理由でC氏を新しい恋人にしたのであれば、ここで採り上げたような想起の困難性は生じないであろう（このことは経験的に明らかな事実でもある、といってよいかもしれない）。このとき、B子において、「A氏を好きだった私」と「C氏を好きである私」との間には持続してありつづける「私」が存在しており、そのことによって想起が可能になると考えられる。

ところで、ここで問題にしたような「持続」がどのようなものかを、外部から一義的に

決定することは出来ない。過去の「私」と現在の「私」とが同一の「私」として持続している状態とは、数式においてイコールで結ばれるような「同一」でもなく、また物質として「同一」であるといった固定的な「同一」でもない。過去と現在を貫く「私であること」の同一性——持続——とは、どこかに「ある」ものではなく、常に、再構成され続ける、ある種の運動体である。逆に言えば、動きを止めてしまえば、途端に消滅してしまうような同一性である。それは、変化の中でのみ現われてくる、動的な同一性のことである。

さて、心理学における従来の記憶理論では、もし情報が脳のどこかにあるのならば、手がかりさえ与えてやれば想起は可能であると説明するだろう。ちなみに、これを、外的記憶補助とか、記憶の状況依存性という。しかし、「手がかり」という空間的結びつきのみを考える従来の理論から与えられる説明は的確ではない。先の例で採り上げた彼女（C子）においても、それは明らかである。彼女はその当時の状況そのものである写真を見せられてもぴんときてはいない。先の「私」の例においても、いくらその当時の周辺状況を思い出すことが出来ても、「boy」という単語をグニャグニャ線として見ていたことそのものは一向に想起できないし、いくら子どものときの自転車を見せられたりその場所に連れて行かれたりしても、自転車に乗れなかったことをリアルに思い出すことができないのである。

思い出す状況をうまく設定してやっても思い出すことが出来ないことがある。繰り返し述べているように、様々な次元における「私」の持続を欠いているのであれば、そこには想起はない。空間的な援助がいくらあっても、時間的な「持続」がなければ想起はできないのである。仮に、従来の記憶理論でいう「脳内貯蔵庫」の内部に空間的にそれは「あった」としも、時間的なつながり——すなわち、持続——がなければ、それは主体にとって「忘却」されるのである。

このように考えてくると、「記憶能力」というのは一体何か、という問題を「持続」という問題とともに再び問い直したほうがよさそうである。もう一歩進んで応用問題を作ってみよう。

2歳の子どもがいるとしよう。ごく普通の子どもとする。

彼の親は、彼の2歳の誕生日の出来事を彼が「忘れないようにするために」その日から毎日一回想起させ続けていく。そのまま15歳になった彼は間違いなく2歳の誕生日の出来事を想起することは可能であろう。そして、たしかに、それを聞く人々は、紛れもなく正確な「彼の2歳の出来事」を耳にすることができるだろう。

このとき、彼は本当に「想起」しているといえるだろうか、という問題である。

確かに、外部から観察するかぎり、15歳の彼の口からは2歳の誕生日の出来事が語られてはいるだろう。しかし、想起している15歳の私と、想起されている2歳の私との間に、同じ「私」の持続はあるのだろうか。

具体的にみていこう。

2歳の誕生日（これをX日としよう）の一日後に彼が想起しているのは、おそらくX日の出来事そのものではある。そして、翌日に彼が想起しているのも、また、同様である。そして、一カ月後、半年後、一年後……、おそらく、ある時点から、それは、彼にとって「やすやすと」思い出せるものになることは容易に想像できる。ひいては、彼は一字一句間違えずにそれを語れるようになるだろう。そのような状態のとき、彼は、かつての2歳の誕生日を想起しているといえるのだろうか。

そうではないだろう。それは「過去」の「想起」ではない。彼は現在という時間のなかで過去という時間を想起している、というよりは、彼は毎日自動的に同じ情報を反復している、といったほうがよいだろう。ここには「思い出されるべきこと」は無い。それは思い出されることなしに、いつもそこに在るようなものである。それは、彼に身体化されたもの、すなわち「常に在る」ものになっているのである。このことは、彼は「もはやない過去」をもはや語れない、ということの意味している。

これは新たな「忘却」の発生といえる。いわば「時間」の忘却である。彼の語りには、時間性の欠如、過去感の欠如がある。

恐らく、本来「想起」とよべるものであれば、2歳の誕生日の翌日行われた最初の想起において発せられた「あの日」という言葉は、一カ月後に発せられた「あの日」という言葉とは完全に同一ではない。もちろん言語表記としては同一である。が、主体にとっての「あの日」とは、想起している今現在つまり「この日」からそこまでの隔たりを直接的に意味している。すなわち、最初の想起における「あの日」は一日分の「あの」を意味しており、一カ月後の想起における「あの日」は一カ月分の「あの」を意味している。

ところが、毎日想起を続けた彼は、最終的に毎回殆ど同じ意味の「あの日」という言葉を発するようになったはずである。これは同時に、2歳の「あの私」と、それを想起している現在の「この私」との間に、何ら差異がなく、何らの変化もないことを意味している。そして、ここにあるのは、もはや持続とは呼べないような、単純な同一性である。彼の想起（もはや想起とは呼べないのであるが）の上では、「あの私」と「この私」とは、等式でたやすく結ばれるような同一性を持ち、もはや「あの」と「この」という語を用いる必要がないほどの等しい関係にある。

「持続」と「変化」という語だけでこのことを説明するならば、以下のようになるだろう。

これまでの例とは異なり、ここには確かに「持続」がある。但しこれは、日毎に繋げられていく為に、殆ど変化を許さないような、あまりにも強力な持続であった。これによって、「持続と変化」の、「持続」は成し遂げられたが、「変化」が失われてしまった。しかし同時に、もはや「持続」は時間的な持続ではなく、「同一」としか呼べないようなものになった。

よって、彼は「想起」が不可能になったのである。

おわりに

以上、時間的変化を生きる我々人間に特有の記憶現象を検討するとともに幾つかの思考実験を試みた。ここで得られた「持続と変化」という道具は、今後有用なものとなろう。こうした新たな視点から、記憶力という問題も変更を迫られるだろう。たとえば、俗にいう「記憶の弱いひと」は、必ずしも〈記憶力の弱いひと〉なのではなく、〈変化に富むひと〉か、もしくは〈持続の強いひと〉、といえるのかもしれない。(以下次号)

引用文献

- Reed, E. S. 1994 Perception is to self as memory is to selves, Neisser, U. & Fivush, R. (Eds.), *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*. pp. 278-292, Cambridge Univ. Press.